

「理解」することと「記述」すること： エスノメソドロジーの視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/187

「理解」することと「記述」すること

—エスノメソドロジーの視点から—

佐々木 啓

1. はじめに

本稿は、社会学においてしばしば問題とされる観察と記述の関係性の問題について、それをエスノメソドロジーの視点から論じることにより、物事を観察すること、およびそれを「理解」し「記述」¹⁾ することとはいかなることであるのかを論証することを目的としている。

自然科学における一般的な意味での観察とは違い、社会科学、とりわけ社会学における観察は、その性質上常に人々の行為やふるまいに向けられるものである。そうであるがゆえに、社会学においては、観察者（社会学者）と、実際の行為やふるまいを行っている人々（当事者）たちとの相互的な「理解」の一致が、自らの研究の正当性を根拠づけるための前提条件とされてきた。すなわちそれは、極言すれば、行為者の主観と観察者の客観的な記述の一致の問題として見ることができる。しかし一方で、このような双方の「一致」は必ずしも常に得られるわけではない。観察者の行う「理解」や「記述」と、当事者たち自身の行為の「理解」との間にギャップが生じることはしばしば起こりうるし、そもそも人間は他者が持つとされる動機や意図といったものに直接触れることは不可能である以上、双方の完全な一致などあり得ないという考え方もあり得るからである。しかしいずれにせよ、社会学が「社会」についてのさまざまな現象、すなわち人間同士の相互行為やふるまいと関係するさまざまな事柄をその研究の題材としている以上、こうした問題は常に社会学の問題として問われるものであったし、またそれは多くの論争を呼び起こすものとなってきたのである。

以上のような問題に対し、本稿では、人々の行為やふるまいを「理解」ということ、そしてそれを観察し「記述」ということについて、それを「人々の方法」を分析しようとする「エスノメソドロジー」の視点から説明することを試みる。とりわけ、人間の心の内面にあるとされる動機や意図といったものと、それを他者が「理解」し「記述」することの間の概念的な関係について、そこに存在するある種の混乱を取り除き、またそれらがいかにして人々の行為やふるまいと結びついているのかを明らかにすることにより、上記の問題について考察していくことにしたい。

2. 他者の行為と動機の問題：エスノメソドロジーの視点から

2.1. 行為者の心の「不可視」性

前節で述べたような問題において大きな要因となるものの一つに、他者の動機や意図といったもののいわば「不可視」な性質を挙げることができるだろう。すなわちそれは、その人個人の持つ動機や意図といったものは、結局のところその本人にしか完全に理解すること

ができないというものである。またそうであるがゆえに、それを観察し記述する観察者は、当人たちの「理解」について、いかにそれらに対して精確にアプローチできるかが観察や分析における大きな鍵となる、といった考え方が生まれることになる。そしてこうした考え方は、ある種の一般的な常識として日常生活において広く共有されている事柄であるともいえる。例えば小説やエッセーの読解などにおいて、しばしば作者自身の心情を問うような問いかけが行われることがある。なぜこうした問いかけが行われるのかといえ、それはそれらの作品を生み出した作者は、登場人物などの動機といったものを把握することができる立場にあり、またそうであるからこそ作者はさまざまな話の意味づけが可能になる、という常識的推論に基づいた考えによるものだと見なすことができる²⁾。

以上のような考え方の根底には、いくつかの問われることのない前提が暗黙のうちに導入されている。それは、ひとつは当人の行う行為やふるまいに対する意味づけを行う最終的な決定権はその当人自身にあり、それ以外の他者にはそうした決定権がないか、あるいはあったとしても当人のそれよりも優先度が下がるという前提である。そしてもうひとつは、個人の動機や意図といったものに対し、他者はそれらに直接触れることができないため、個人の「心的状態」とされるものはすべて個人の「私的領域」のうちにあるという前提である。そしてこれらの前提が、他者の行為や、それに付随するとされるさまざまな動機や意図の問題をより困難なものにしているといえるのである。

こうした問題に対し、社会学はその歴史上さまざまな形でアプローチを行ってきた。例えば M. ウェーバーにおける有名な「理解社会学」は、行為者の主観的意味を因果的に理解する立場から他者の行為やその動機などを分析しようと試みている〔Weber 1922=1972〕し、ウェーバー社会学を継承しつつも、やがてそれらを独自の形に発展させた T. パーソンズによる一連の社会学理論（とりわけ初期の「主意主義的行為論」など）においても、他者の行為とその動機や意図などを「外的条件」や「規範的志向」から説明しようとしたものであった〔Parsons [1937] 1949=1976-1989〕。そしてこれらのアプローチは、いずれも前述したような他者の動機や意図の不可視性を前提にしているように思われる³⁾。そしてこうした前提に基づく他者の動機や理解へのアプローチは、その後も社会学における行為の観察や現象の分析として利用され続けているといえる。

しかし、以上のような他者の動機や意図の不可視性という前提に基づいた行為の観察や分析には、一つの大きな問題が含まれている。それは、我々の日常生活においては、行為やふるまいは多くの場合「理解」できることが多く、またその際の観察や分析が問題となることもほとんどないという事実である。もちろん、こうした「理解」においては、それはそもそも行為者の本当の動機や意図といったものを適切に説明したものではなく、観察者の単なる思い込みにすぎないのではないかという考え方もできるだろう。しかしながら、そのようなある種の懐疑論的態度は、とりわけ日常生活におけるさまざまな人々のふるまいにおいては、そもそも問題とされること自体が極めて稀である。もちろん、日常的な人々の相互行為の理解において、そうした疑念を抱くことはいくらかでも可能である。だがそのような懐疑論的態度は、それを本格的に実践しようとすればするほどある種の無限後退に陥ってしまい、そもそも他者との相互的なやりとりを行うことができなくなってしまうだろう。つまり、そ

のような態度をとり続ける限り、人は日常的なコミュニケーションを行うことができなくなってしまう、それは我々が日常的に相手を「理解」しているという事実からかけ離れた実態を想起することに他ならないのである。

それでは、現実的な行為やふるまいと矛盾なくこれらの問題を考えるためにはどのような形でアプローチをすればよいのであろうか。以下ではこうした問題について、エスノメソドロジーの知見を用いることによって考察していくことにしたい。

2.2. エスノメソドロジーの目的と方針

前節で述べた問題について考察していく前に、まずは本稿の論拠の中心となるエスノメソドロジーの手法とその研究方針について明らかにしておく必要がある。

「エスノメソドロジー (Ethnomethodology)」とは、1960年代にアメリカの社会学者である H. ガーフィンケルによって提唱された社会学の一分野である。「エスノメソドロジー」という名称は、直訳すると「人々 (ethno-)」の「方法 (method)」の「学問 (-logy)」という意味になり、その名の示すとおり「人々が実際の日常生活において、いかにして自らの行為やふるまいを秩序だったものとして相互的に作り上げているのか」を分析することを目的とする。例えばエスノメソドロジーにおいては、社会学においてしばしば研究の対象とされる「社会構造」といったものについて、それを外在的な「実体」として扱うことを放棄する。その代わりにエスノメソドロジーにおいては、そうした「社会構造」がいかにして人々によって相互的に作り上げられているのか、そしてまたいかにして人々にとってそれが「構造」として認識されるのかという「人々のやり方 (方法)」それ自体を分析の対象とするのである。これはすなわち、エスノメソドロジーは徹頭徹尾「社会」というものを「人々による相互的な、その場での協働によって産出されるもの」として捉えることを意味している。

さらにエスノメソドロジーにおいては、従来の社会学が想定し研究の対象としてきた上述の「構造」といったものが、社会学者によって「発見」されるのではなく、すでに人々によって相互的に作り上げられたものとして我々の前に「現出している」という事実を焦点を当てる。つまりエスノメソドロジーにおいては、社会において発生するさまざまな現象を社会学者が新たに「見つけ出す」のではなく、それを日常的な人々たちのやりとりによって「作り上げられた」ものとして考えるのである。ガーフィンケルはこうした人々のやりとりによる日常生活世界の構築を「日常生活における協調した活動からなる現在進行中の達成としての社会的事実という客観的実在性」[Garfinkel 1967: vii]⁴⁾と表現しているが、ここからもわかるとおり、エスノメソドロジーは首尾一貫して「人々の相互的な達成物としての社会」を分析し、またその際に使用されるさまざまな「人々の方法」に焦点を当てるのである。

こうしたエスノメソドロジーの方針は、ガーフィンケルのいう人々の相互行為における「観察可能で報告可能 (observable-and-reportable)」[Garfinkel 1967:1] な性質という考え方に基づいている。彼はこれらの2つの概念をまとめて「アカウントブル(account-able)」[ibid.] な性質とも表現しているが、こうした概念はエスノメソドロジーにとって極めて大きな意味を持つ。そのため以下では「アカウントブル」概念と、そうした概念の持つ意義について説明することにした。

2.3. 「アカウンタブル」であるということの意義

人々の日常的な相互行為の連鎖によって「社会」そのものが作り上げられているとするならば、そこにはそれらを成立させるための一つの条件が存在しなければならないことになる。それはすなわち、人々はお互いのやりとりやふるまいといったものをお互いに「理解できる」必要があるということである。というのも、相互行為を行っている人々は、何らかの形でお互いが「何をしているのか」といったことをその場でそのつど「理解」し、またそれに対しそのつど「ふさわしい」行いをしなければ、そもそもそのような相互的なやりとりを行うことができなくなってしまうからである。そして、日常生活において我々は実に多くの他者のふるまいを「理解」しているといえる。例えば朝の通勤・通学時に、お互いの面識もない多くの人々が駅のホームで行列しているのを見たとき、我々はそれを「電車を待つ人々が整列して待っている」ものとして「理解」することができる。そしてそれは単に個人的な意見などではなく、もし仮に実際に駅のホームで並んでいる人たちに「今何をしているのか」とインタビューしたとしても、おそらく同様の回答が得られるだろうということを我々の多くは予想することができる。もちろん、中には自分は整列しているのではなく、他のことをしているのだと回答する人もいるかもしれない（例えば「列に並んでいた」のではなく「本を読んでいた」や「音楽を聴いていた」など）。とはいえ、たとえそのような回答があった場合においても、我々はそれをやはり「電車を待つために整列していた」ものとして「理解」するだろう。すなわち、ある場面を見てそれを「整列している」と表現するとき、そこにはすでにお互いが何をしているのかということがわかっているわけであり、またそうであるからこそ、我々はそれらの一連のやりとりを「電車を待っている行列」として表現したり、あるいはそのように「記述」したりすることが可能になるわけである。

ガーフィンケルのいう「アカウンタブル」という概念は、まさにこうした事実を指摘したものに他ならない。すなわち我々の日常生活において、多くの相互行為やふるまいがさまざまな形で実践され、またそれらが何らかの形で理解できるものとして我々の前に現れるとき、それらはすでに「観察可能」で「報告可能」なものとして、すなわち「アカウンタブル」なものとして人々に「理解」されているということである⁵⁾。そしてまた、それらは常に場面や状況に応じて意味づけが変化し、またそれらの変化についてもそのつど人々はそれを「理解」できるという点も重要である。例えば前述した「行列」が駅のホームではなく「横断歩道の前」で行われているとしたら、我々はそれを「電車を待っている」のではなく「信号待ちをしている」と理解するだろう。またそれ以外のさまざまな場面や状況の変化に対しても我々はそれを「アカウンタブル」なものとして見ることができる。いずれにせよ、我々は場面や状況に応じた「そこで起こっている出来事」をそのつど適切に理解し、またそれに応じたふるまいを行うことができるからこそ日常的な相互行為が可能になるのである。

そしてこのような事実は、同時にそれを観察し記述する観察者においても当てはまる。すなわち、社会現象を分析する社会学者は、多くの場合同時にその社会で生活する「成員」の一人でもあり、またそうであるからこそそのような様々な現象を観察し記述することができることになる。つまり、行為者の行為やふるまいにおける「アカウンタブル」な性質は、当

事者同士のふるまいを理解可能にするだけでなく、それを観察し記述する社会学者にも働くのである。そしてエスノメソドロジーはこのような事実に基づき、そこに存在する「人々の方法」を分析することを行うのである。

3. 「理解可能性」としての自然言語

3.1. H. サックスの研究と「自然言語」の持つ性質

前述したように、人々のふるまいの「アカウンタブル」な性質は、それが行為者だけでなく観察者においても同様にもたらされるものとして取り扱われている。では、そもそもそのような性質は何によってもたらされるのであろうか。こうした問いに対し、エスノメソドロジーは主にその要因を「自然言語の働き」に見出している⁶⁾。すなわち、我々の持つ日常的な自然言語とその使用こそがそうした性質を生み出しているというのである。

ガーフィンケルと並び、エスノメソドロジー研究の発展に大きく貢献した人物であるH. サックスは、初期の論考において研究者が行う行為の「記述」の問題を取り上げ、社会学的な研究を行う際に使用される常識的概念の考察を行っている [Sacks [1963] 1990]。とりわけサックスが問題にしたのは、社会学者が、現象を分析する際に使用する言葉についてだった。例えば、E. デュルケムは『自殺論』の中で「自殺」という概念を「死が、当人自身によってなされた積極的、消極的な行為から直接、間接に生じる結果であり、しかも、当人が結果の生じうることを予知していた場合を、すべて自殺と名付ける」[Durkheim 1897=1985:22 傍点省略]と定義づけたことは有名である。しかしサックスによれば、このような定義は人々の間で一般的にすでに使用されている「自殺」の概念とは別の「自殺」の概念を作り出したものにすぎず、むしろ社会学が探求すべきなのは、人々の日常的な「自殺」の概念それ自体を分析することであるとしている。すなわちそれは、人々は社会学者が「自殺」という概念を定義する以前に何が「自殺」で何が「自殺ではない」のかをすでに日常生活の中で分類しているという事実が存在するということ、そしてそのような分類が実際にどのようにして行われているのかを分析することにサックスはその関心を寄せていたことを示すものであった。そしてこのような人々の日常的な概念使用を研究するという方針は、後のガーフィンケルとの共同研究を通じて、エスノメソドロジーを「自然言語」の働きへと注目させるものでもあった⁷⁾。

後にサックスとガーフィンケルは、人々の行為の理解可能性について、それを自然言語の働きによるものだとし、とりわけある言語に習熟した人々のことを「成員 (member)」として定義付けを行っている [Garfinkel & Sacks 1970]。すなわち、人々の行為やふるまいを「アカウンタブル」なものとして理解可能なものにする働きを言語は持つのであり、また同じ言語を習熟した「成員」たちはそれを通じてお互いが何をやっているのかがわかるという理解可能性を提唱したのである。そしてこうした言語による理解可能性という考え方は、当然のことながらある言語に習熟した「成員」の一人である観察者に対しても適用される。むしろ、ある観察者が人々の行為やふるまいを見て、それを言語を用いて何らかの形で「記述」することができるという事実は、それ自体が「成員」としての能力 (competence) を利用して

いるということであり、またそのことが行為者と観察者との間の理解や記述の可能性を生み出すということである。つまり人々は言語を通じてつながっているということである。

そしてこうした言語の働きには、前節で問題とされたような、私的で内面的なものとされる「動機」や「意図」といった概念に対するある種の「透明性」をもたらす働きもある。ではそうした働きはどのように説明できるのか。以下ではその働きについてより詳しく見ていくことにする。

3.2. 日常言語と論理文法

人々の行為やふるまいに理解可能性を与えるものとしての言語は、同時に人々の相互行為における他者の「動機」や「意図」といったものについても同様の理解可能性を与えてくれる。とりわけ、一般的には「不可視」とされている他者の「動機」や「理解」といったもの（以下これらをまとめて「心的概念」と呼称する）についても、またそれが人々の日常的な使用によって理解可能なものとなることを明らかにした研究がある。それが J. クルターによる「論理文法分析 (logico-grammatical analysis)」[Coulter 1979=1998] である。

クルターは、エスノメソドロジーの自然言語の働きによる理解可能性の概念を、言語哲学者である G. ライルや後期の L. ヴィトゲンシュタインらの言語哲学の概念を導入することによって発展させ、言葉の概念同士の関係を分析することでそうした理解可能性の要因を明らかにしている。彼の論理文法分析という手法は次のようなものである。例えば「本」という言葉の概念を考えてみる。「本」という言葉の概念を把握するためには、例えばそれが「読む」や「紙」といった他の言葉の概念と結びついていることを理解しなくてはならない。そして「読む」という概念もまた「本」や「文字」とは結びつくが、一方で「走る」といった概念とは結びつくことがほとんどないことを知らなくてはならない。このように、論理文法とは言葉の概念同士の関係性について、「それぞれの概念は一定範囲の他の諸概念とは有意味な・理解可能なしかたで結びつくのに、別の諸概念とはそのように結びつくことがない。様々な概念について、それぞれの概念がどの概念とどう結びつくのかを示すこと」[Coulter 1979:2=1998:11] なのである。

そして重要なことは、こうした言葉の概念同士の関係性やその日常的な使用といったものは、言語を習熟した「成員」たちにとって公的 (パブリック)⁸⁾ な基準に基づいたものでなければならないということである。すなわち、言葉の概念同士の関係性とは個人の私的な基準に基づいて形成されているのではなく、ある言語体系が持つ一定の基準によって形成され、またそうであるからこそ我々は言語を用いてコミュニケーションを取ることが可能になるというわけである。もちろん、あらゆる言葉の概念が厳密な基準に基づいて関係づけられているわけではない。むしろそれらの関係性はある程度の緩やかな幅をもって関係づけられている。つまり、言葉の概念関係は「規範的に組織されているのであって、決定論的なしかたでコントロールされてはいない」[Coulter 1979:3=1998:12]⁹⁾。そして、それらの概念関係がどのようにして結びつけられ、理解可能なものとなっているかは、それらが規範的に組織される以上、そのつどその場の文脈や状況に応じて変化する。だからこそ、言葉の概念関係を分析するためには、人々の実際的な言葉の使用そのものに着目する必要があるのである。

そしてもう一つ重要なことは、クルターの論理文法分析においては、前述した「心的概念」もまた同様の手法を用いて分析することが可能であるという点である。クルターによれば、「心的概念」の関係性も、一般的な言葉の概念関係と同様に、それがどの概念と結びつきどの概念と結びつかないのかという公的な基準によって作り出されている。そして人はそうした「心的概念」を使用して何らかの表現を行うとき、そのような基準に基づいて表現する以上、やはりそれらの概念使用も公的な基準に基づいて行われていることになる。こうした議論についてももう少し詳しく見てみよう。

「心的概念」が個人の私的領域にあるものではないことを示す事例として、ここでは「理解」という概念を取りあげてみたい。「理解」は、すでにこれまで述べてきたように、一般的には個人の内面的な心的状態を示すものとして考えられている。しかしクルターによれば、そもそも「理解」という言葉の概念を心的状態の過程として見なすことは誤謬であるという。すなわち「理解」とは「達成された成果」であり、また心的な活動などではありえないのである〔Coulter 1979:37-40=1998:75-80〕。なぜなら「理解」という言葉は多くの場合、他者とのやりとりにおいて、自分が物事などを「理解した」といったことを相手に「公示」するために用いられるからである。そしてそのような場合の「理解」とは、決して個人の「ピンときた瞬間」といった心的過程をあらわすものではなく、自分が「理解した」ということを相手に示すための状況や文脈と密接に関わるものなのである。一例として、小学生の子どもが学校の授業で掛け算の計算をしている場面を考えてみよう。そのとき、その子が掛け算を正しく「理解」したかどうかを判断する際に教師が用いる基準とは、決してその子どもの「心的状態」を見ることなどではなく、その子がノートや黒板に書いた「計算」に基づくものになるだろう。そしてその計算結果が間違っていたとしたら、たとえその子がどんなに「自分は掛け算を理解している」と教師に訴えたとしても、それは「間違い」として退けられるだろう。このように見るならば、「理解」とは個人の内面的な心的過程ではなく、むしろ相互的なやりとりや状況にまつわる概念だということがわかる。そしてその際重要なことは、こうした一連のやりとりで行われる、やりとりの過程や周囲の状況や文脈そのものがそうした「理解」というものをまさに「理解」として我々に示すものだということである。すなわち「心的概念」の使用も、我々の言語のもつ公的な基準に基づいて使用されている以上、それらの概念関係が一つの意味を持つものとして（すなわち「理解」できるものとして）現れることになる。そしてそれらの概念使用がいかなるつながりを持っているのかということについては、実際のやりとりを通じて相互的な意味確定が行われるという、まさにその過程で明らかになるのである。

以上のようなクルターの論考は、これまで述べてきたような問題に対する大きな指針を与えてくれる。すなわち通常「心的概念」として考えられ、その人自身にしか完全に把握することができないとされている「理解」や「意図」といったものは、言語という社会的な装置を通じて表現される以上、それらが表現されるまさにそのやりとりの中で他の人々にとっても理解可能なものになることを示しているのである。もちろん、そのような過程を経ても明らかにならない「他者の心」は存在する。しかし重要なことは、我々が一般的に「不可視」の存在として捉えている「動機」や「理解」といったものは、個人の私的領域にあるので

はなく、むしろ外的な関係性によってはじめてそれらが「動機」や「理解」となるということだ。そしてそのような相互的な確定作業を見ていくことの重要性をエスノメソドロギー研究や論理文法分析は指摘しているのである。

では、実際に人々はいかにして相互理解を達成しているのだろうか。以下では実際の会話のやりとりを通じてそれを明らかにしていくことにする。

4. 会話における「理解」の提示と相互理解の達成：電話相談のやりとりから

本節ではこれまで述べてきた見解に基づき、実際のやりとりにおいて人々がどのようにして「理解」を行うのか、そしていかにしてそれは我々にとって「わかる」ものとして「記述」できるのかを、実際の会話データを使用しながら分析していくことにする。本稿ではこうしたデータを分析する方法として「会話分析 (Conversation Analysis: 以下 CA)」の手法を用いている。CA は現在エスノメソドロギー研究においてもっとも普及している分析手法であり、その名の示すとおり、人々の「会話」を詳細に分析することによって、そこで用いられているさまざまな「人々の方法」を分析することを目的とする。なお、CA においては会話の断片 (トランスクリプト) を特殊な方法で転写している。そのため、会話の転写に用いているそれぞれの記号の意味などについては本文末の資料を参照願いたい。

4.1. 今回使用したデータについて

今回使用したデータは、2015 年 8 月 3 日に NHK ラジオ第一放送で放送された「夏休み子ども科学電話相談」においてなされた会話の断片である。この番組は主に小学生以下の子どもたちからの相談に対し、各分野の専門家 (大学教授や動物園の園長など) がその質問に答えるという形式で進行していく。また専門家の他に司会 (NHK アナウンサー) がついており、子どもたちの質問へのフォローや連絡先電話番号の告知、その他進行役としての役割を担っている。なお、日にちによって質問に答える各分野の専門家は異なっており、それぞれの分野の専門家がいつ番組に登場するのかは番組の公式ホームページで確認することができるようになっていたため、質問する側もそれに合わせて自分の質問したい分野を選択している。なお、今回取りあげたデータはいずれも「昆虫」に関するテーマのものである。

さて、こうした電話相談においては通常「相談者」と「回答者」というそれぞれの役割を担った人がいることが前提とされる。そして両者は、それぞれの役割に応じた「義務」と「権利」を持った人物として認識され、社会学的にもそうした役割を前提として分析が行われることが多い。しかし CA においてはそのような立場を取ることはない。なぜなら CA においては「それぞれの役割を担った人々が、いかにしてそれぞれの役割を会話を通じて達成していくのか」ということに重点をおくからである。すなわち、CA ではあらかじめ役割を前提とした上で分析を行うのではなく、むしろ、それぞれの人々がいかにしてそうした役割を達成しているのかを「会話の連鎖」や「会話における順番交替」といった概念から見ていくのである。そして本稿においてもこうした立場を踏襲し、いかにして会話が「電話相談」として成立しているのか、そしてその中でいかにして「相談者」や「回答者」がそれぞ

れの「理解」を達成していくのかを中心に分析していくことにする。

4.2. 電話相談における相互「理解」とその達成 (1)

以下ではまず次のような会話の断片を提示したい。これは、ある子どもの電話相談の冒頭において行われたやりとりを転写したものである。

断片 1 (司会者：「司」 質問者：「質」 回答者：「回」 ※個人名の部分は伏せ字)

- 01 司：あ、おはようございます。お名前と、お歳を教えてください。
- 02 質：(2.0) ○○○○○です。
- 03 司：はい。
- 04 質：(1.0) 5 歳です =
- ⇒05 司：=5 歳。(.) え：：幼稚園生、かな？
- ⇒06 : (2.0)
- ⇒07 司：[ようちえん -
- ⇒08 質：[()] いてないです。=
- ⇒09 司：= あ、行っていない [のね。5 歳ですね、ごめんなさい。
- 10 回： [hhh
- 11 司：え：：○○○○○さん。どんな質問ですかあ？
- 12 質：キアゲハは、なんで、おとなのときは、花の、蜜を吸うけど、幼虫のときは、
- 13 質：ニンジン葉っぱを食べるんですか？
- 14 司：はあ、キアゲハ。ちょうちょですね？
- 15 質：(.) はい

ここでは主に司会者と質問者とのやりとりが行われている。この断片において注目すべき点は、5～9 行目のやりとりである。ではどういった点が注目すべき点なのか確認しよう。

5～9 行目において、司会者が質問者についての簡単なプロフィールを聞き出そうとした際にちょっとした「トラブル」が発生していることがわかる。その「トラブル」とは、司会者が質問者のことを「幼稚園生」であるかどうかを確認した際に起こったもので、とりわけ注目すべき点は 9 行目の約 2 秒間にわたる沈黙である。我々はこのやりとりを見て、その沈黙を「質問に答えなかった」ものとして見るだろう。そしてさらに重要な事実がある。それは、そもそも沈黙とは「発話がなかった」ということを示すものであり、そうした事実だけでは「質問に答えなかった」という「回答の不在」として見ることはできないということだ。ではなぜ、我々はこの沈黙を「回答の不在」として見ることができるのだろうか。

その理由は CA における「隣接ペア (adjacency pair)」概念を使って説明することができる。「隣接ペア」とは「(1) 二つの発話からなり、(2) この構成成分としての二つの発話は隣接した位置に置かれ、(3) 各々の発話をそれぞれ別々の話し手が生成するといった特徴」[Schegloff & Sacks 1974:295= [1989] 1995:185] を持つ、概念的なペア関係のことを指す。例えば相手から「挨拶」された場合、我々はこちらも相手に対し「挨拶」を行うこ

とが一般的である。また同様に「質問」を受けたらそれに「回答」し、何らかの「誘いかけ」を受けたら「受諾」あるいは「拒否」を行うといったように、我々の日常的なやりとりにおいてはこうした2つの行為がセットになって行われるものがある。「隣接ペア」とはそうした関係を指すものであるが、これらのペア関係が我々に「回答の不在」を明らかにさせるのである。すなわち、通常のやりとりにおいて「質問」という発話を相手から受けた場合、それに対して我々はすぐに「回答」すべきものとして考える。そしてそのような行為のセットは、前節で指摘したように、ある言葉同士の概念関係として規範的に結びつけられている。つまり、なぜ我々が沈黙を「回答の不在」として理解するのかといえば、それは「質問」という発話のすぐ後ろに来る発話は「回答」であることを多くの人々（「成員」）は知っているし、またそうあるべきだという規範的な視点でそれを見るからである¹⁰⁾。だからこそ、我々はさまざまな可能性としての「沈黙」から「回答の不在」という一つの可能性を得ることができるのだ。つまりそれは、あるべきはずの「回答」が沈黙によって「不在」になっているということの理解可能性である。そして、このことはその後続く会話において裏付けることができる。「回答の不在」の後、司会者は再び同じ発話を繰り返そうとしている（7行目）。しかし、この発話は質問者の遅れてやってきた「回答」によって中断し、司会者は質問者が「幼稚園に行っていない」ことを確認している。そして同じ質問を繰り返すことなく、本題（電話相談）の質問へと話を転換している。こうした一連のやりとりは極めて重要である。なぜなら司会者は同じ質問を繰り返すことをやめ、9行目で質問者の発話の後すばやく「行ってないのね」と発話しているからである。これはすなわち最初に行った質問への「回答」が得られたため、もう一度質問するのをやめたのだということができる。このことはとりわけ5行目と同じ発話でもって質問を繰り返そうとしていたという点からも観察できる。つまり、沈黙の後に再び「同じ発話」でもって「質問」を行うということにより、司会者は「自分の質問が相手に伝わらなかった」という自分の「理解」を提示している。そしてそうであるからこそ、司会者は「回答」が得られた時点で「質問」を中断し、本題へと移行したといえるのである。

なお、このやりとりにおいては、司会者だけでなく質問者の「理解」を見ることも可能になっているといえる。ただし以下の説明は今回の会話の断片からは断言することができないため、あくまでも推測によるものであることをご了承願いたい。

質問者はなぜ6行目で沈黙したのか。その理由はおそらく「自分が幼稚園に通っていない」からだと思われる。「隣接ペア」としての「質問」―「回答」のセットは、同時に「回答」に対してある種の制限を与える。それは「質問」に対して「回答」すべきであるという規範的な要請によるものであり、またそのことが「回答」に対しても一定の制限を与えるものになっている。つまり「回答」とは単に答えればよいというものではなく、同時にその「質問」に対し「適切」なものでなければならないのである。そして5行目の「幼稚園生、かな?」という「質問」は、5歳の子どもにとってはすぐに「回答」することが難しい形での「質問」であるように思われる。例えば「はい」か「いいえ」の一言で答えることのできる「質問」に対して回答者がすぐに「回答」することはたやすい。それは「質問」の形式がシンプルにまとまっているからである。だが今回の「質問」は、特に「回答」が「いいえ」で

ある場合（すなわち「幼稚園生ではない」場合）には、すぐにそれに対して「回答」することが難しい形式としてデザインされているように思われる。なぜならこうした質問における「いいえ」の場合、通常は単なる「いいえ」だけでは質問に「回答」したとは見なされないことが多いからである。例えば何らかの「誘いかけ」に対しそれを「拒否」する場合、多くの場合は単に「拒否」するだけでなく「拒否することの理由」も一緒に述べられることが多い¹¹⁾。それと同様に、今回の「質問」は「幼稚園生ではない」だけではなく「自分が何者なのか」を同時に提示する必要がある「質問」であるように見える。そしてそれに対し適切に「回答」することは容易ではない。なぜなら自分が「〇〇でない」ことを示す「回答」は「〇〇である」ということを示す回答よりも遥かに選択肢が多くなり、煩雑になるからだ。つまり、「幼稚園生である」という「回答」は今回の質問の場合容易であるのに対し、それ以外の「回答」を行うことは、「はい」であることと比較すると難しいのである。特に幼稚園に通っていない5歳児にとって「自分が何であるか」を適切に回答することは容易なことではなかったはずだ。その結果、今回のような沈黙が発生したのではないと思われるのである。

以上の会話の断片からは、ここで提示したこと以外にもさまざまな事実が発見できる。とはいえ断片1についての分析はここまでとし、次節ではもう一つの断片を見ることにしたい。

4.3. 電話相談における相互「理解」とその達成 (2)

以下で見る会話の断片2は、断片1から時間が経過し、質問者の質問（「蝶はなぜ幼虫と成虫で食べるものが違うのか」）に対して回答者が回答している部分である。

断片2（各行頭の表記や伏せ字は断片1と同様）

- 01 回：例えばねえ。え：と、伊豆大島だったかな？ アシタバっていう植物がある
 02 回：でしょう？そういうのがあるんですよ。
 ⇒03 質：(.) ↓はい。=
 ⇒04 回：= ちょっと〇〇ちゃん難しいかな？そういう植物もニンジンの仲間だから、そ
 ⇒05 回：れでもいいみたいよ？
 ⇒06 質：↓ふ：ん。
 07 回：それからねえ。(咳)北海道にあったかなあ？セリっていうのがあるでしょう？
 08 回：わたしたちが食べるセリっていう植物が。(.) それは、ちょっ：と〇〇ちゃん
 09 回：知ってるかなあ？ まあそれでもいいみたいよ？ あ、そういう(咳)ニンジ
 10 回：ンの、仲間なら、いいみたい。(咳)(1.5) だから=
 ⇒11 質：= セロリもですかあ？=
 ⇒12 回：= ん？ん？〔何？
 13 司：〔セロリ。°
 14 司：セロリ。
 ⇒15 質：セロリ。=
 ⇒16 回：= あ、セロリ。あ、そうそうセロリも大丈夫。=

この会話の断片で展開されている話の概要をまとめよう。回答者は質問者の質問に対し、キアゲハなどの蝶は幼虫が食べることでできる植物に卵を産む習性があるということを説明した後、ではキアゲハは実際にどのような植物に卵を産むのかということを質問者に伝えている。そしてこの断片において注目すべき点は3～6行目および11行目から16行目にかけの一連の流れである。

断片上ではわかりにくいかもしれないが、3行目の質問者の「はい」および6行目の「ふーん」(継続子)¹²⁾は、実際の音声を聞くとかなりトーンダウンした「はい」や「ふーん」になっている。そして3行目の反応を受けて、回答者はすぐさま質問者の子どもに「今の話は難しかったかな?」というフォローを入れ、その後「アシタバ」を「ニンジンの仲間」と言うことによって質問者に自分の説明を「理解」してもらおうとしている。しかしそれも6行目の「ふーん」によって上手くいったとは言い難いことが示されている。そしてこれらの一連のやりとりは、その後の11行目から16行目にかけてのやりとりも含め、それを「相互的な理解の達成」という視点から分析すると興味深いやりとりが行われていることがわかる。ではそうした視点から改めて会話の断片を見ていくことにする。

会話において相手に「うなずく」といった反応は、単に相手に対して「話を聞いている」ことを示す以上の含みをもつものとして考えることができる。例えば相手や相手の話に対し「興味がない」ことを示す一つのやり方として「素っ気ない対応をとる」というものがあるが、その際の一つの方法として、トーンダウンした「あいづち」というものがあるだろう。すなわち直接言葉によって相手に自分の意見を伝えるのではなく、それを態度で示すという方法が我々の日常的なやりとりにおいてしばしば使用されるということである。このように考えると、トーンダウンした「あいづち」というのは、その相手の話に対して何らかの「不満」のようなものを伝える働きを持つといえる。そうした「不満」の内容についてここで詳細に述べることは差し控えるが、いずれにせよ、相手の話に対する何らかの「不満」(もしくは非同意など)を表明する一つの技法としてこうした「あいづち」を打つことは、日常生活のやりとりを振り返ってみればすぐにわかることである。

さて、断片に再び話を戻すと、3行目で行われている質問者の「はい」に上述したニュアンスが含まれていることは間違いない。それは質問者の「はい」と発話するタイミング(すぐに「はい」と言わず、少し間が空いている)や、何よりもその後の回答者のフォロー(「ちょっと〇〇ちゃん難しいかな?」およびアシタバが「ニンジンの仲間」であることの追加説明)によって裏付けできる。つまり、回答者が4行目でこのような発話を行ったという事実によって、少なくとも回答者は自分の回答に対し質問者が「理解」できていないことを感じ取り、ゆえにこのような発話を行うことによって「自分の説明を理解してもらおうとした」と説明できるのである。さらにまた、4行目およびその後の9行目～10行目にかけて登場する「ニンジンの仲間」という言葉も先ほどの説明を補強するものとなっている。断片1における質問(12～13行目)を見ればわかるように、質問者は「なぜキアゲハの幼虫はニンジンの葉っぱを食べるのか」と質問している。このことから、回答者は質問者にとってよりわかりやすい例として「ニンジンの仲間」という言葉を用いたのであろう。すなわ

ち、小さい子どもに対して植物の名前を列挙して説明するのは難しいため、「ニンジンの仲間」という言葉を使うことにより、今までの話を理解してもらおうという目的に基づいてこのような発話がなされたのだと見ることができるのである。

しかしその後の質問者の反応も芳しくなかった。そのため回答者は、今度は質問者の住んでいる北海道と関連づけて「ニンジンの仲間」の植物の話を続ける。そしてそのとき、質問者が急に「セロリ」という発話をしたため、そこからセロリもニンジンの仲間であるという話に展開する。ここで重要になってくるのは、やはり 11 行目の質問者の発話である。この発話は順番交替としてはやや不適切なものであったため、回答者がもう一度発話を聞き直すという「トラブル」が発生しているが、いずれにせよここで行われた質問者の発話は、これまで見られたようなトーンダウンとは違った「理解」を示している。すなわち、この場所で「セロリ」と言うことによって、質問者は自分の「理解」を提示したのだ。「セロリ」という言葉は「植物」の一つである。そしてそれをこのやりとりの中で提示するということは、回答者の話を質問者が「理解」していたことを示すものである。なぜなら、回答者のこれまでの話の流れを理解できていなければ、ここで「セロリ」という植物を出すことはできないからである。つまり、質問者は「セロリ」と発話することによって、今までの話の流れに対し自分がそれを「理解」したこと、および同時に自分の理解を相手に提示することを行ったといえる。だからこそ、回答者は質問者の発話を聞き直した後ですぐにセロリも「ニンジンの仲間」であることを告げたのだ。このように、相互的な理解が達成されるその有様は、それが常にその場で協働的に作られるものである以上、行為者にとって理解可能なものであるし、またそれらを観察し「記述」する人々にとっても「理解」できるものになっている。それはすなわち、人々が「成員」であることによってもたらされる理解可能性であり、またそのような知見に基づいて我々の「理解」を見るということは、人々の相互理解とは何か、そしてそれを「記述」することとは何かという、一つの実践的な分析をもたらし得るのである。

5. まとめにかえて

これまで論証してきたことは、動機や意図といった「心的概念」と呼ばれるものが、実際には相互的なやりとりによって明らかになるということであった。その中でも本稿では、とりわけ「理解」が人々の相互的な達成であるという点を会話の断片を用いて分析した。もちろん、こうした論証を経てなお「心の不可視性」を主張することはできるだろう。また、いくら「心的概念」の「公的」な性質を証明したところで、心の中にあるその人の持つ本当の意図や動機は不透明なのではないかということも言えよう。しかし重要なことは、こうした「心的概念」が使用されているということについて、我々は概念の関係性によってそれらを使用しているのであり、またそうであるからこそ、そもそも我々は自分の心の状態について語ることができるということだ。確かに他者からは見えない心の感情というものは存在する。人は怒りに震えるとき、確かに「怒り」という情緒を経験しているし、また悲しいときに「悲しみ」という経験を持ち、それらの感情そのものを他者が直接経験することはできない。その点で心は「不透明」だと言いたくなるだろう。だがエスノメソドロジーにおける理

解可能性や論理文法分析といったものは、それらの経験自体を否定するものではない。問題にしたいのは、我々が通常「心的概念」と呼ぶものが何を指しているのかということなのである。つまり、我々が通常「理解」や「動機」といったものに対し、それを「心の中にあるもの」あるいは「個人の私的な経験」として捉えてしまうということが問題なのであって、感情それ自体が存在しないということを肯定するものではない。

そしてこのような分析を行うことによって、通常考えられているような「心的概念」を別の視点から捉えることが可能となる。もちろん、今度はその「分析」自体がどこまで正しいのかという問いは残る。実際の当事者たちはそのようなことを考えていなかったのではないかと疑うこともできるだろう。しかし今回示したかったことは、それらの分析の正当性がそうした「当事者中心主義」ではなく、むしろそれらをいかに「展望のきいた叙述」[Wittgenstein 1953=1976 Para.122]として描き出せるかということである。すなわち、「成員」の多くが「そのように見ることができる」ものであり、またそれによって相互的なやりとりが「理解」できるような「記述」を基準とした、エスノメソドロジカルな分析の有用性を少しでも示すことができたならば、それは意義のあることだといえるだろう。

資料 本稿における会話の断片（トランスクリプト）の表記について

本稿で使用している会話の断片（トランスクリプト）は、G. ジェファーソンが開発した会話の転写方法および好井裕明らによって展開された方法[好井 他（編）1999]などを参照している。以下では本稿で使用した記号の凡例について説明する。

- ・ [「重なり」⇒会話者たちのことばが重なっていることを示す。
- ・ = 「密着」⇒途切れなくことばもしくは発話がつながっていることを示す。
- ・ () 「括弧」⇒何かことばが発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。
- ・ (数字) 「数字つき括弧」⇒その数字の秒数だけ沈黙があることを示す。また、ごく短い間合いは「(.)」という記号で示される。
- ・ : 「音声の延ばし」⇒直前の音が延ばされていることを示す。なお、: の数によって延ばされる音の長さをあらわす。
- ・ - 「ハイフン」⇒直前のことばが不完全なまま途切れていることを示す。
- ・ ? 「クエスチョン」⇒語尾の音が上がっていることを示す。
- ・ h 「呼気音」⇒呼気音を示す。なお、h の数によって吸気音の長さをあらわす。
- ・ 。 「読点」⇒語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
- ・ ↓ 「下矢印」⇒音調が極端に下がっていることを示す。
- ・ ° ° 「上付きの○」⇒囲まれた箇所の音が小さいことを示す。
- ・ (用語) 「用語つき括弧」⇒会話において括弧内の動作が行われたことを示す。

注

- 1) 本論文においては、一般的な意味での観察や理解、あるいは記述といった概念との区別を行うため、必要に応じて各用語にしばしばカギ括弧を用いている。こうした用法はあまり馴染みのな

- いものかもしれないが、本稿で取り扱う言葉の概念をより明確にするためにあえて使用している。
- 2) こうした日本の国語教育などにおける作者の動機理解的な問い以外にも、これらに類する事例はさまざまな場面において見いだすことができる。例えば世間を揺るがす「凶悪事件」が発生したときなどには、しばしば犯人の「犯行動機」や、あるいは犯行に至るまでの「心の闇」といったものを解き明かそうとする言説がメディアなどを通じて流布されることが多い（とりわけ犯人が「未成年」であった場合、そうした傾向がより一層強まることは容易に想像することができるだろう）。いずれにせよ、このような言説が一般的に受容される背景には「他者の心の不可視性」および「本人自身の語る動機こそが『動機』としてふさわしいものである」という素朴な前提が大きく関わっていることは間違いないだろう。
 - 3) ただし、ウェーバーの「理解社会学の方法」については、それが成立するためには「観察者と観察対象者との間で行為や行為に関する事物の『意味』の内容についてある程度の一致が存在していなければならない」[牧野 2011: 64] という、本稿で後述するようないわば言語的な「意味の共有」の視点をウェーバー社会学が持っていたとする見解も存在する。また近年の研究においては、ウェーバー社会学が行為者の主観を中心としたいわゆる「独我論的」な行為論とされることに対し、それはもっぱら「社会学の基礎概念」論文を中心に論じられてきたこと、そして「理解社会学のカテゴリー」論文を見た場合そうした批判は必ずしも当てはまらないとする論考も存在する[松井 2007]。なお、こうしたウェーバー社会学とエスノメソドロジーとの親和性については[佐々木 & 田上 2015] も参照のこと。
 - 4) ガーフィンケルのこうした表現は、E. デュルケムによる「社会的事実の客観的実在性」という主張を換骨奪胎したものとなっている。
 - 5) もちろん、実際には「人々が何をしているのかわからない」といった行為やふるまいも存在することは確かである。しかしここで重要なことは、その場合における「わからない」ということも含めて我々のふるまいは「アカウンタブル」であるということである。なぜなら何らかの行為やふるまいを「わからない」ものとして見るためには、それらを事前に「わかる」ものと「わからない」ものに分類することができなくてはならないからである。すなわち我々がある場面のふるまいを「何をしているのかわからない」というとき、それはいわゆる完全な「無秩序」としてではなく、何らかの「秩序」を基にして判断した結果「わからない」という形で表現していることに注意しなくてはならない。
 - 6) ただし初期エスノメソドロジー研究においては必ずしも「自然言語」の働きにその要因を求めるのではなく、別の要因によってそれを説明することがあった。例えばガーフィンケルは初期の論考においてそうした要因を「背後期待 (background expectancies)」(または「共通理解」) という概念で考察していた[Garfinkel 1967:36=1989:34]。現在のような自然言語への注目が行われるのは、後述するように H. サックスとガーフィンケルの共同研究や J. クルターらの研究によるところが大きい。
 - 7) こうした考察のより詳しい解説については[西阪 1997a][西阪 1997b] および[前田 2008]等の論考を参照のこと。
 - 8) 本稿ではクルターの原文や翻訳書に基づき「公的 (public)」という言葉を使用しているが、日本語における一般的な意味での「公的」概念とはやや異なる点に注意したい。ここでいう「公」とはいわゆる国や行政などをあらわす「公」ではなく、あくまでも同じ言語を使用する人々（すなわち「成員」）にとって広く共有され、そしてそれらの人々にとって違和感なく読んだり聞いたりすることのできる言葉の概念同士の関係性のことを指している。
 - 9) こうしたクルターの主張の下敷きとなっているのは、ヴィトゲンシュタインが『哲学探究』の中で論じた「私的言語の不可能性」[Wittgenstein 1953=1976 Para.243-280]の議論である。

- 10) 言葉の概念関係とそこに含まれる規範性についてのさらなる詳細は [Coulter 1983] を参照のこと。
- 11) こうした「受諾」と「拒否」の非対称性（「誘いかけ」に対し通常「受諾」は「拒否」よりも優先されるという構造が存在すること）の詳細については [好井 他（編）1999] の pp.28-31 を参照のこと。
- 12) 「継続子（continuer）」とは、CA においてはあいづちを打ったりして「自分が話を聞いていること」を相手に示し、かつ相手にそのまま話を続けることを促す働きを持った発話のことを指す。

参考文献

- Coulter, J., 1979 *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*. Macmillan. =1998 西阪仰（訳）『心の社会的構成—ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点—』新曜社.
- Coulter, J., 1983 "Contingent and A Priori Structures in Sequential Analysis." *Human Studies*. Vol.6 pp. 361-376
- Durkheim, É., 1897 *Le suicide: etude de sociologie*. =1985 宮島喬（訳）『自殺論』中央公論社.
- Garfinkel, H., 1967 *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall. = [1989]1995 北澤裕, 西阪仰（部分訳）『日常活動の基盤—当り前を見る』『日常性の解剖学—知と会話』マルジュ社. pp.31-92
- Garfinkel, H. & Sacks, H. 1970 "On Formal Structures of Practical Actions." in McKinnney, J.C. & Tiryakian, E.A. (eds.) *Theoretical Sociology: Perspective and Developments*. Appleton-Century-Crofts. pp. 337-366
- 前田泰樹, 2008 『心の文法—医療実践の社会学—』新曜社.
- 牧野雅彦, 2011 『マックス・ウェーバーの社会学—『経済と社会』から読み解く』ミネルヴァ書房.
- 松井克浩, 2007 『ヴェーバー社会理論のダイナミクス—「諒解」概念による『経済と社会』の再検討』未来社.
- NHK, 「夏休み子ども科学電話相談」HP (<http://www.nhk.or.jp/radiosp/kodomoq/>) ※ 2015/10/05 現在
- 西阪仰, 1997a 「会話分析になにができるか—『社会秩序』の問題をめぐる—」奥村隆（編）『社会学になにができるか』八千代出版. pp.115-153
- 西阪仰, 1997b 『相互行為分析という視点』金子書房.
- Parsons, T. [1937]1949 *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*. Free Press. =1976-1989 厚東洋輔, 稲上毅, 溝部明男（訳）『社会的行為の構造』（1）～（5）木鐸社.
- Sacks, H., [1963]1990 "Sociological Description." in Coulter, J., (ed.) *Ethnomethodological sociology*. Edward Elgar. pp.85-95
- 佐々木啓 & 田上大輔, 2015 「〈秩序〉と〈規範〉をめぐる—考察—エスノメソドロジーとヴェーバー社会学の視点から—」『年報社会学論集』第 28 号 pp.100-111
- Schegloff, E.A. & Sacks, H., 1974 "Opening up Closings." in Turner, R., (ed.) *Ethnomethodology*. Penguin. pp.289-327 = [1989] 1995 北澤裕, 西阪仰（訳）『会話はどうのように終了されるのか』『日常性の解剖学—知と会話』マルジュ社. pp.175-241
- Weber, M., 1922 *Wirtschaft und Gesellschaft*. =1972 清水幾太郎（訳）『社会学の根本概念』岩波書店.

Wittgenstein, L., 1953 *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell. =1976 藤本隆志 (訳) 『ウィ
トゲンシュタイン全集 8 哲学探究』大修館書店.
好井裕明, 山田富秋, 西阪仰 (編著), 1999 『会話分析への招待』世界思想社.